

不登校を未然に防止するための校内支援の研究

—学級生活不満足群の生徒に焦点をあてて—

2017/3

四日市市教育委員会 教育支援課

はじめに

子どもたちが将来生きていく社会は、多様で変化が激しく、課題は一層複雑化し、解決の道筋が明らかでない問題が多く存在することが予想されます。

そのため、自身が身につけた知識・技能や収集した情報、体験等を活用し、他者と協働しながら主体的に問題を解決していく力を養うことが求められています。この力を育成するために、次期学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を求めています。

本市においても、「学ぶこと」と「社会とのつながり」を意識した教育課程を実現し、「社会人になっても通用する問題解決能力」の養成を図ることが重要であると考えています。このことは、平成27年11月に「四日市市教育大綱」の理念の一つに示され、平成28年1月に策定した「第3次四日市市学校教育ビジョン」にも筆頭の施策として位置付けています。

この取り組みを進めるため、本市では、「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック」(平成25年3月に全教職員に配付)を活用した授業改善に取り組んできました。このガイドブックでは、子どもの思考過程を「5つのプロセス」で表し、「四日市モデル」として示しました。この考え方を課題研究にも取り入れ、今後の「四日市モデル」を活用した授業のあり方について研究を進めています。

本年度の課題研究では、小学校体育科においてタブレットPCを効果的に活用することで、「対話的な学び」を活性化させる研究を行いました。また、中学校数学科において「四日市モデル」を活用し、日常生活の事象を扱った問題を取り入れることで、数学的な思考力を高める研究に取り組みました。さらに、本市の課題である不登校を、未然に防止するための取り組みを行い、校内支援体制のあり方について、調査・研究を進めてきました。

その成果を研究調査報告書として、ここにまとめました。これらの研究成果が、学校・園の日々の教育実践に役立つことを期待します。

最後に、本課の研究調査を進めるにあたって、御指導・御助言いただいた国立教育政策研究所初等中等教育研究部の松尾知明 総括研究官、並びに研究協力員をはじめとして調査・実践面で御協力いただいた学校等の関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

平成29年3月

四日市市教育委員会教育支援課
課長 田中 重行

— 目 次 —

I	研究主題	1
II	主題設定の理由	1
III	研究の目的	4
IV	研究の内容と方法	
1	研究の概要	4
2	本研究での校内支援体制のモデル	5
3	データの収集	5
4	研究の計画	7
V	結果	
1	生徒の抽出	8
2	生徒のアセスメント	8
3	生徒の支援の実際と支援の結果	9
4	支援の効果	13
VI	考察	
1	生徒の抽出	14
2	アセスメント	15
3	抽出生徒への支援	15
4	支援の計画・実施・評価	16
VII	これからの校内支援の在り方	
1	不登校未然防止に向けての校内支援体制のモデル	17
2	情報の収集と整理	18
3	生徒のアセスメントと抽出	18
4	支援の計画	19
5	支援の実施	19
6	支援の評価・改善	20
VIII	まとめ	
1	成果	21
2	課題	22
	[引用文献・参考文献]	23
	[資料]	24

I 研究主題

不登校を未然に防止するための校内支援の研究
 —学級生活不満足群の生徒に焦点をあてて—

II 主題設定の理由

「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省）によると、不登校の児童生徒数は、平成 19 年以降緩やかな減少傾向にあったが、平成 24 年度以降再び増加している。

「不登校児童生徒への指導結果状況（平成 26 年度）」【表 1】によれば、「指導の結果登校するまたはできるようになった中学校の生徒の割合（全国平均）」は、およそ 30%にとどまっている。また、本市中学校の不登校生徒の学校への復帰率は 22.3%で全国平均を下回っている。以上のことから、一度不登校になった児童生徒が学校復帰することは、難しい状況にあることがわかる。本市においては復帰率を上げるとともに、不登校を未然に防止するための取り組みが必要であると考えられる。

【表 1】 不登校生徒への指導結果状況（平成 26 年度）

区分	小学校 (全国 国・公・私)		中学校 (全国 国・公・私)		小学校 (四日市市 公)		中学校 (四日市市 公)	
	人	%	人	%	人	%	人	%
指導の結果登校する またはできるようになった児童 生徒(復帰率)	8,586	33.2	30,152	31.1	8	9.4	63	22.3
指導中の児童生徒	17,278	66.8	66,881	68.9	77	90.6	220	77.7
うち継続した登校には至らない ものの好ましい変化が見られる ようになった児童生徒	5,623	21.7	19,845	20.5	16	18.8	56	19.8

(出典) 「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省・四日市市）

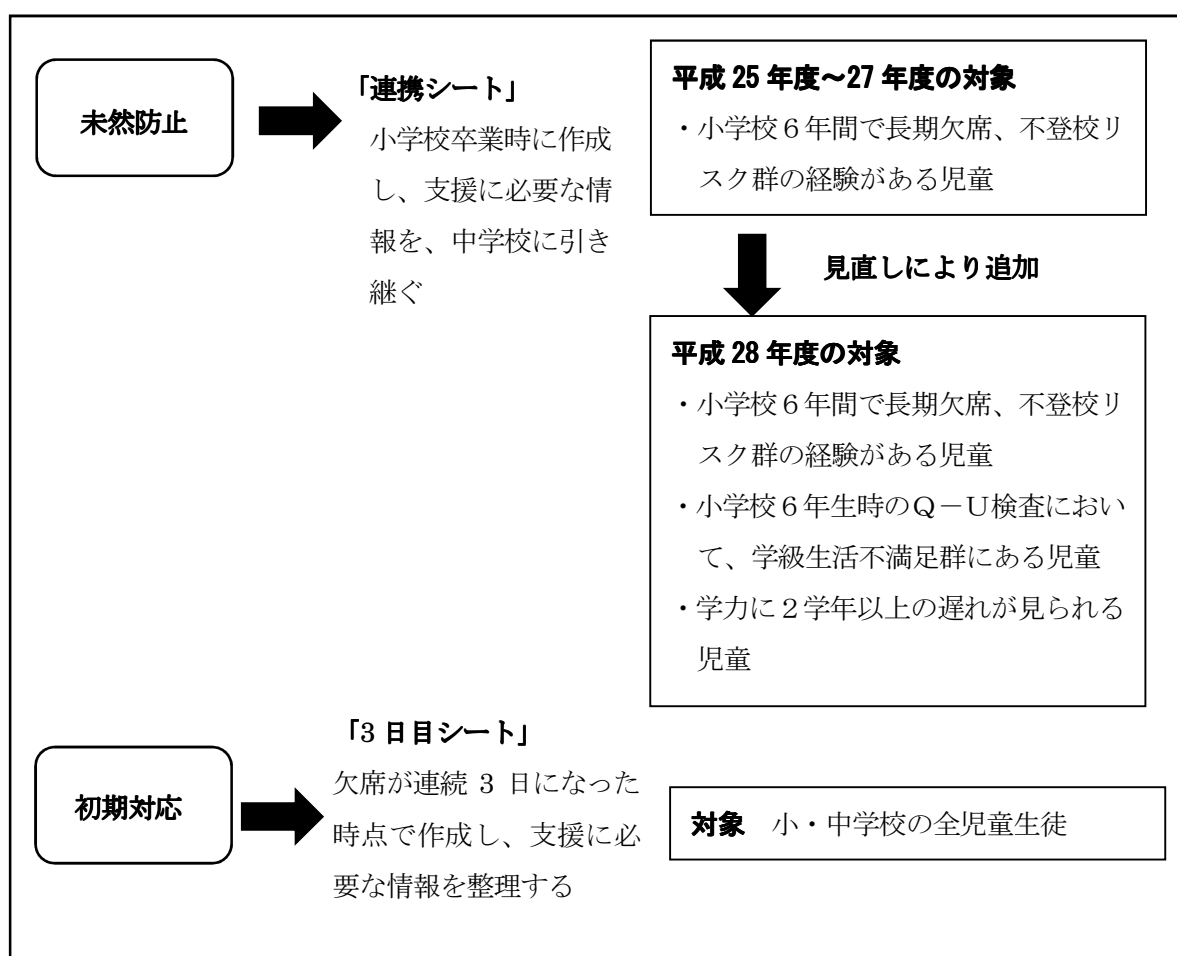
このような状況を踏まえて、本市では、平成 25 年度から小中不登校連携シート（以下「連携シート」）と欠席 3 日目シート（以下「3 日目シート」）を作成し、不登校の未然防止や初期対応の取り組みを始めた。「連携シート」では長期欠席¹と不登校リスク群²の児童の情報を小学校から中学校に引き継ぐことで、個々の生徒に応じた早期支援に力を入れている【図 1】。

¹ ここでの長期欠席の定義は、年間の欠席が 30 日以上に該当する生徒である。

² 本市のリスク群の定義は、小学校 4 年生から 6 年生で年間欠席 10 日以上、遅刻早退 30 日以上、別室登校の経験がある、のいずれかに該当する生徒である。

このように取り組んでいるものの、昨年度、本市の中学1年生に不登校生徒数の減少は見られなかった。また、不登校生徒として報告されたうちの78%は、「連携シート」を作成した生徒ではなかった。

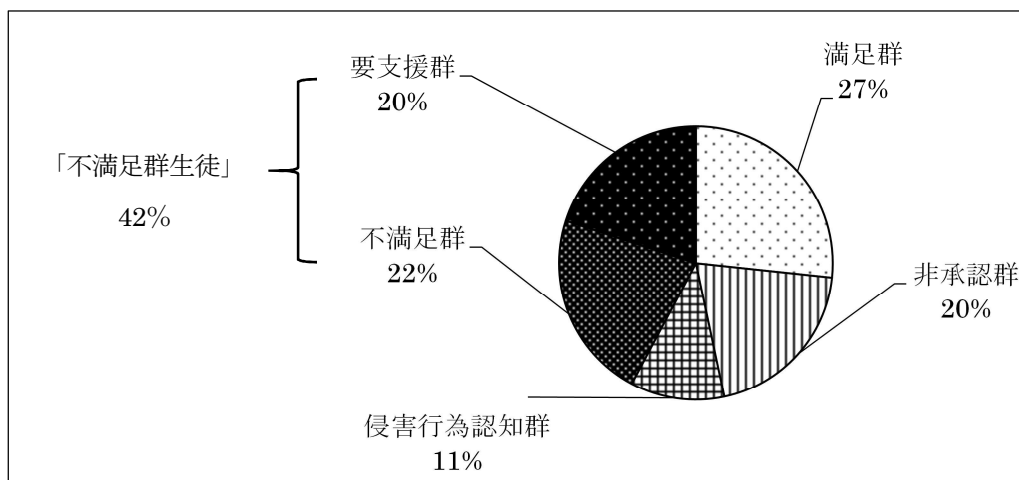
これらから、本市は不登校傾向のある生徒を対象とした「連携シート」を見直す必要があると考え、昨年度末に「Q-U検査において、学級生活不満足群³にある児童」と「学力（読み・書き・計算等）に2学年以上の遅れが見られる児童」を作成対象として追加した。それは、中学校に入学後、学力に遅れがあることや、集団に適応できないことが、不登校のリスクになると考えたからである。



【図1】本市の不登校対策

³ 質問用紙の答えを点数化し、承認得点、被侵害得点がともに低い群のこと

Q-U検査の学級生活不満足群と不登校の関連について考察してみると、学級生活不満足群の生徒（以下「不満足群生徒」と不登校には密接な関係があると推察できた。「欠席3日目シート考察」（四日市市教育委員会、2016）の「不登校生徒のQ-U検査結果の内訳」【図2】によると、今年度の中学1年生の1学期末の段階で不登校になっている生徒が、1学期に行われたQ-U検査で不満足群と要支援群⁴に属した割合は42%であった。つまり、不登校になった生徒の40%以上が「不満足群生徒」であったわけである。このことから、「不満足群生徒」を対象とし、適切な支援を行うことは、不登校生徒数を減らす上で重要であると考えた。



【図2】不登校生徒のQ-U検査結果の内訳

Q-U検査を活用した不登校の未然防止についての先行研究の多くは、主に学級づくりに重点をおくものである。林・西森（2010）は、不登校の未然防止・早期発見・早期対応にQ-U検査を活用し、一次支援・二次支援⁵を中心にチーム支援を行うことで、不登校未然防止の基盤となる温かい学級づくりに取り組んだ。松本（2007）は、児童の対人的関係能力を育てる一次的アプローチ⁵の取り組みを通して、不登校未然防止のための心の居場所づくりの在り方を研究した。また、鳥取県教育センター（2006）は、Q-U検査を活用して学級診断、コンサルテーションを行うことによる具体的な方策と実践を提案した。

このような先行研究からも、不登校の未然防止には「全ての児童生徒を対象に、日々の授業や学校生活の中で、児童生徒が『学校に来ることが楽しい』と感じられるような『魅力的な学校づくり』を進めていくこと」（国立教育政策研究所、2012）が大切になってくることは間違いないと思われる。

⁴ 学級生活不満足群のうち、さらに承認得点が低く、被侵害得点が高い生徒の属する群のこと

⁵ 石隈（1999）は学校心理学において一人一人の子どもの問題状況の解決と成長を促進するための援助を三段階に整理した。一次的援助サービスは「すべての子ども」に対する課題に対する予防的・促進的援助である。二次的援助サービスは「一部の子ども」に対する課題の早期発見・早期援助を目的とした援助である。三次的援助サービスは「特定の子ども」に対する発達課題・教育課題に対する特別な援助である。「一次支援・二次支援・三次支援」の三段階は高知県心の教育センターが、「一次的アプローチ・二次的アプローチ・三次的アプローチ」の三段階は広島県教育センターが、それぞれ石隈の理論をもとに整理、作成したものである。

しかし、不登校になるリスクを持った生徒をできるだけ早く抽出して、年度初めから個々に応じて早期に支援することができれば、不登校になる生徒がさらに減少するのではないだろうか。つまり、本市においては「連携シート」で抽出された個々の生徒に対して早期に支援を行うことで、不登校になる生徒が減少する可能性があると考えた。

また、同時に、個々の生徒への早期支援のためには、校内の支援体制や支援のためのツールづくりが重要になってくると思われる。

そこで、本研究では、「不満足群生徒」に対して不登校未然防止に向けた校内支援体制のモデルを試行し、検討することを通して、不登校を未然に防止するために必要な校内支援体制のモデルを提案したい。

III 研究の目的

本研究の目的は、不登校を未然に防止するために、校内支援体制のモデルを試行し、検討することを通して、より実効性のある新たな校内支援体制のモデルを提案することである。

IV 研究の内容と方法

1 研究の概要

市内中学校1校に協力を依頼し、第1回Q-U検査（中学1年生時）と「連携シート」（小学6年生時）で、いずれも「不満足群生徒」としてあげられている生徒を抽出する。その抽出生徒に対し、適応指導教室と協力校の教員で支援方法を検討し支援を行う。具体的に支援を行う中で、より効果的な支援を行うための校内支援体制について考察する。

(1) 第1回Q-U検査（中学1年生時）と「連携シート」（小学6年生時）で、ともに「不満足群生徒」としてあげられている生徒を抽出する。

(2) 「連携シート」を用い、以下の項目に、入学後、中学校の担任・教科担当・部活動担当・適応指導教室指導員が、生徒観察をもとにチェックをする。

- ・[本人の様子]（「性格」「行動」「学習の様子・学力」「友人関係」「健康生活面」）
- ・[学校での好きな活動]
- ・[学校での苦手な活動]

(3) 小学校から引き継がれた「連携シート」と中学校の担任・教科担当・部活動担当・適応指導教室指導員がチェックを入れた「連携シート」をもとに、抽出生徒に対して、適応指導教室でアセスメントを行う。「連携シート」によって、アセスメントに必要な情報が得られるかを考察する。

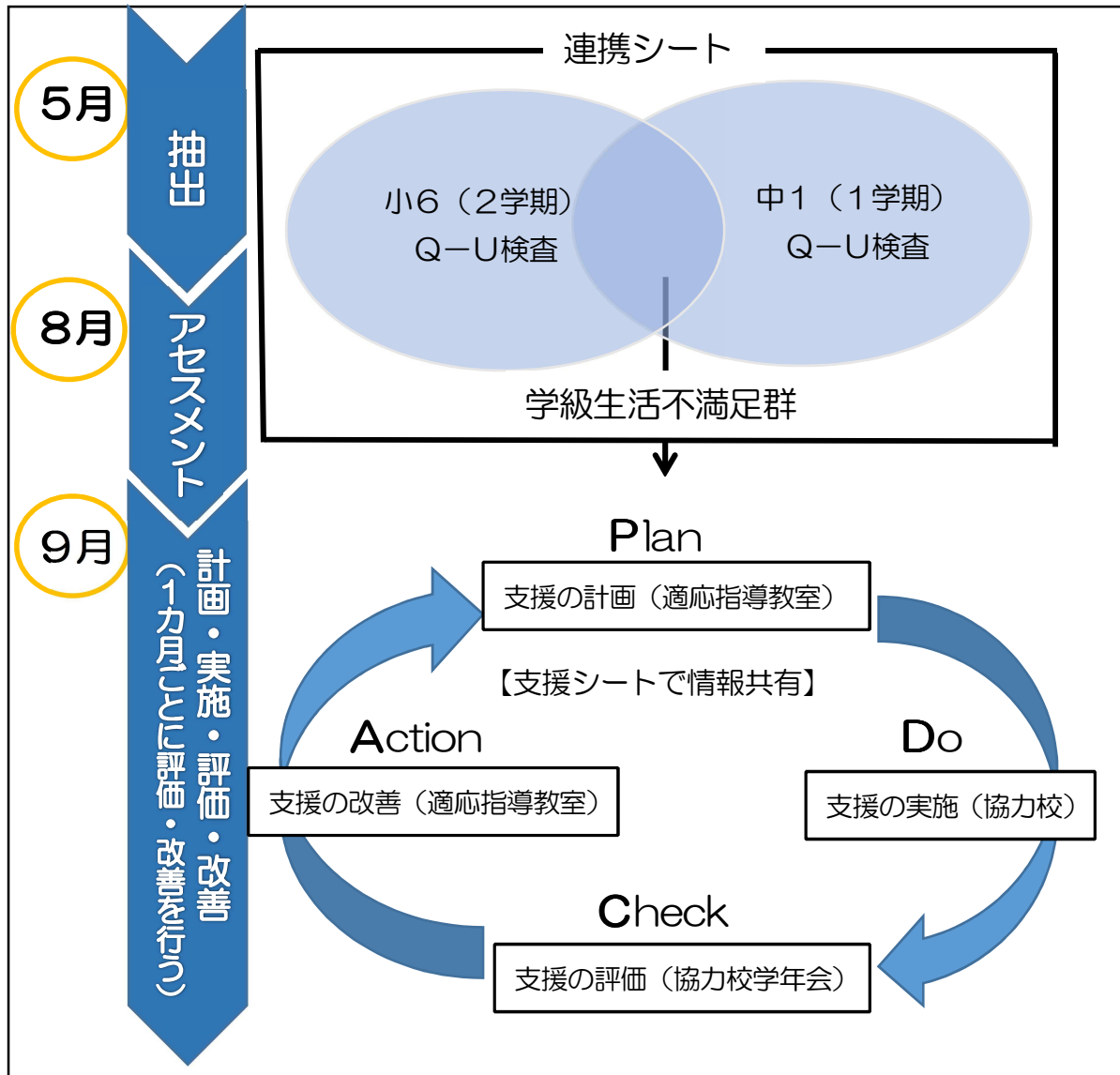
(4) 抽出生徒のアセスメントをもとに、適応指導教室指導員が「支援シート」を活用して具体的な支援の方法を提案し、協力校の学年担当の教員と情報共有する。

抽出生徒について、学年担当の教員が「支援シート」とQ-U検査結果を活用しながら支援を行う。「支援シート」が、支援を行う上で適切なツールとなっているかを考察する。

- (5) 学年担当の教員に対するアンケートと聞き取りを行い、校内支援体制のモデルの作成をするための課題を探る。
- (6) 不登校未然防止に向けた校内支援体制のモデルの作成を行う。

2 本研究での校内支援体制のモデル

本研究では、以下の校内支援体制のモデルを試案として、その有効性を検証することにする。



【図3】不登校未然防止に向けた校内支援体制のモデル（試案）

3 データの収集

本研究では、以下のデータを用いる。今ある資源をできるだけ生かすことを考え、「連携シート」とQ-U検査結果をアセスメントに活用する。また、協力校と適応指導教室、学年間での情報共有や支援を円滑に進めるため、「支援シート」を用いる。

(1) 連携シート【資料1】

<目的と内容>

小学校の時点で、不登校の兆候がある児童、学級になじめないと感じている児童、学習に困難が見受けられる児童を抽出し、中学校において継続的に適切な支援を行うことを目的とするシートである。

[欠席理由・きっかけ][本人の様子][学校での好きな活動][学校での苦手な活動][保護者・家庭の状況][関係機関との連携][指導の経過][その他または中学校に特に配慮してほしいこと期待すること]の8項目からなる。これらの情報を、年度末に、小学校の担任が記入し中学校に申し送る。小学校から申し送られたものを中学校1年生担当の教員で情報共有する。

<本研究での活用方法>

中学校の担任・教科担任・部活動担当が[本人の様子]についてチェックを入れる。また適応指導教室指導員も授業を参観し、チェックを入れる。中学校の担任・教科担当・部活動担当、適応指導教室指導員、小学校担任（合計12人）のチェックを合計する。本来の使用用途は、小学校の教員がチェックし、中学校に申し送るというものであるが、本研究では、中学校における生徒のアセスメントにも用いる。

(2) Q-U検査

<目的と内容>

生徒一人一人について理解するとともに、学級集団の状態を把握し、今後の個別対応や学級経営の方針を把握することを目的とする検査である。

個人についての情報、学級集団についての情報、学級集団における児童生徒たちの相対的な位置をつかむ。個人についての情報では、個々の生徒の友人との関係、学習意欲、教員との関係、進路意識への満足度や意欲を測る。また、いじめや冷やかしを受けている可能性を把握する。

<本研究での活用方法>

不登校のリスクを持っていると思われる生徒を抽出するために活用する。また、生徒のアセスメントや支援方法を検討するために用いる。

(3) 支援シート【資料2】

<目的と内容>

抽出生徒の課題や支援の方法を具体的に提示し、学年教員が統一した支援を行うことを目的として作成した。「連携シート」やQ-U検査、授業観察によって行ったアセスメントをもとに支援方法を提案する。実際の支援で生徒にどのような変容があったかを[支援の結果]に記入する。支援方法は随時見直ししながら更新していく。

本研究で得たデータをもとに、「支援シート」を改善する。

(4) 不登校未然防止に関する教職員アンケート【資料3】（以下「教職員アンケート」）

<目的と内容>

本研究終了後に、校内支援体制のモデルや支援シートを改善することを目的として、作成した。[不登校になるリスクを持った生徒][未然防止に有効な支援方法][未然防止に有効な情報]について質問し、校内支援体制のモデルの改善に生かす。

<対象>

協力校の教職員

<時期>

平成 28 年 12 月

4 研究の計画

月	本研究についての計画	実施する内容
4月	研究計画立案	協力校への研究依頼
5月	第1回課題研究会議 第2回課題研究会議	第1回Q-U検査実施
6月	第3回課題研究会議 (第1回国研指導)	生徒の抽出
7月		「連携シート」によるアセスメント（適応指導教室）
8月		第1回Q-U検査の分析 抽出生徒の支援の方向性・支援方法の検討
9月	第4回課題研究会議 (第2回国研指導)	観察の結果をメールで報告
10月	第5回課題研究会議	支援の方向性・支援方法の見直し
11月		支援結果をメールで報告 第2回Q-U検査実施 支援の方向性・支援方法の見直し
12月	第6回課題研究会議 第7回課題研究会議 (第3回国研指導)	支援の結果をメールで報告 成果と課題の考察 「教職員アンケート」実施
1月	第8回課題研究会議 (第4回国研指導)	
2月	第9回課題研究会議	

V 結果

1 生徒の抽出

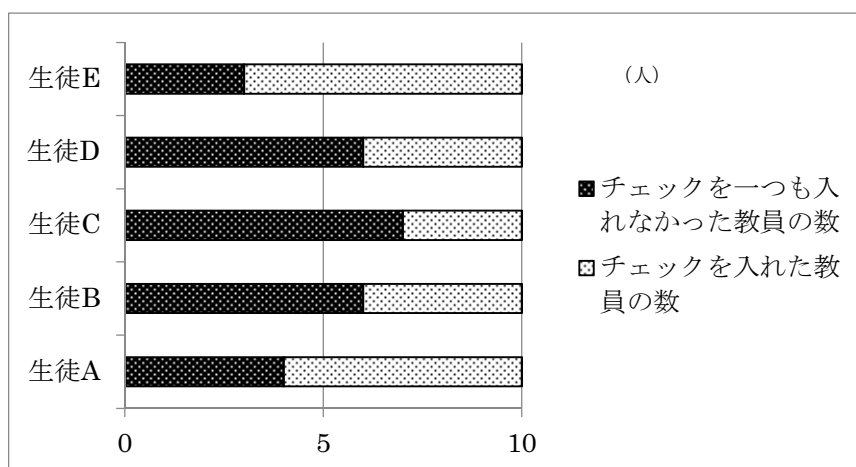
今回、第1回Q-U検査（中学1年生時）と「連携シート」（小学6年生時）でともに「不満足群生徒」としてあげられている生徒が7人いたが、各クラス1人以下の抽出となるように、1クラスで2人以上いる場合は担任がより気になる生徒を選択した。その結果、5人を研究の対象とした。（以下、それぞれの生徒を、生徒A、生徒B、生徒C、生徒D、生徒Eとする。）抽出した生徒について、協力校の学年担当の教員に聞き取りをすると「特に問題のない生徒であるように見受けられるし、他にもっと気になる生徒がいる」という意見であった。また、研究の最後に実施した「教職員アンケート」でも「中学校生活を見ている限りでは、特にこれという問題のない生徒も含まれていた」という記述があり、アンケート実施時までは大きな課題は表出しなかったようである。

そこで、「教職員アンケート」で「不登校になるリスクがあると感じる生徒」として、複数の教員からあげられたものをまとめると以下のようになる。

自己肯定感が低い（4人） 耐性が低い（2人） 柔軟性がない（2人） 無気力（2人）
自分の気持ちを表現できない（3人） 周りの目を気にする（2人） 学力が低い（2人）
部活動に熱心ではない（2人） コミュニケーションを上手に取ることができない（12人）
家庭環境が整っていない（12人） 発達の課題が見られる（4人）

2 生徒のアセスメント

当初は、中学校の担任・教科担当・部活動担当に「連携シート」の[本人の様子][学校での好きな活動][学校での苦手な活動]の項目にチェックをしてもらい、抽出生徒5人のアセスメントを行う予定であった。しかし、担当教員のべ50人中、「連携シート」にチェックなしの教員の数は26人であった【図4】。

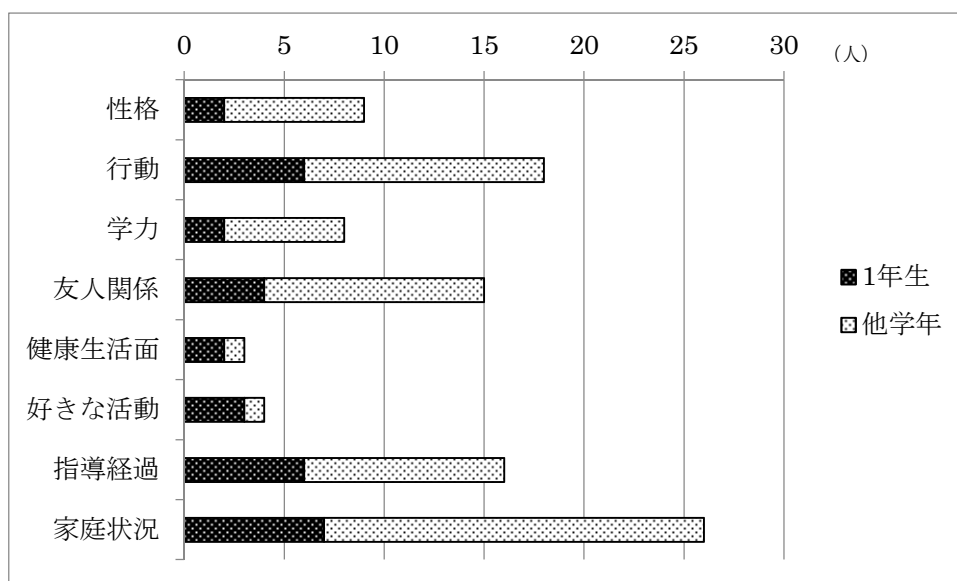


【図4】連携シートのチェック数

このように「連携シート」にチェックを入れた教員の数が少なかったため、アセスメントに「連携シート」を用いるのが難しいと思われた。特記事項欄にも「特に気になることがないので何もしていない」という記述があり、抽出生徒に対する課題が見えにくい状況であった。

そこで、適応指導教室で仮説の課題⁶を設定し、教員が生徒を観察していく際の観察の視点を提示した。その結果、「支援シート」にいくつかの課題があげられた。(資料として1人の生徒の「支援シート」を添付した【資料2】。)

また、「教職員アンケート」で、「連携シート」によって引き継がれた情報で未然防止に活用できると感じた項目について質問したところ、【図5】のような結果になった。



【図5】「連携シート」で不登校の未然防止に活用できると感じた情報

3 生徒の支援の実際と支援の結果

[仮説の課題]と[観察の視点]を提案することによって、生徒の気になる様子が具体的に報告された。その生徒の様子をもとにして、適応指導教室で支援方法を提案した。適応指導教室が提案した支援方法と、協力校の教員によって「支援シート」にまとめられた支援の実際と支援結果は以下のとおりである。

⁶ 「連携シート」の生徒の情報をもとに仮定した課題

生徒A

課題	自己肯定感が低い	一斉授業では理解できない
生徒の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分に自信がない。 ・ 班員から注意されたり、指示されたりすることを、いじめや悪口と受け取ることがある。 ・ 自分の世界があり、周りの生徒がついていけないことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一斉授業の指示が入らない。自分が聞かなければならないという意識が低く、ほかのことに気を取られているようだ。 ・ 数学は学習内容についていけないことも多い。
支援方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 担任の先生が気づいた生徒のよいところを伝えていく。 ・ 担任の先生が、なぜ注意をいじめや悪口と受け取るかを聞き取るとともに、その注意の意味をかみ砕いて伝えていく。 ・好きなこと、得意なことの情報を教師間で共有していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視覚的に目に見える形で提示したり、指示を端的にしたりする。 ・ 集団の中で注意を向けさせる合図を教育相談で考える。 ・ 作業的内容を多く取り入れ、机間巡視を多くする。 ・ 計算問題を重視した学習を行う。(1番の問題だけは自力でやるなどのアドバイス)
支援の実際	<ul style="list-style-type: none"> ・ 合唱コンクールの練習で大きな口を開けて歌えていることをパート練習で周りと本人に伝えた。 ・ 歌をしっかりと歌えていたという生徒の思いに共感し、ほめる機会を持つようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習の様子を見守った。
支援の結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 歌うことには自信が持てたようで、楽しそうに歌うことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 数学的な理論はわからないが、移項などの機械的な作業はできた。

生徒B

課 題	活動に消極的・無気力	集団生活の中の不適応
生徒の様子	<ul style="list-style-type: none"> 夏休みの部活動を体調を理由に休んだり、早退したりする日が何日かあった。 体育祭で足の痛みを理由に競技を避けることが多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> 足にマニキュアを塗ったり、校則違反の靴下をはいたりするようになった。 指導に対して素直に自分の弱さを認めることができない姿がみられた。
支援方法	<ul style="list-style-type: none"> 評価については、まず気持ちを持ってたこと次に少しでも行動にうつせたことというようにスモールステップで評価していく。 得意なこと（人前で意見を言うなど）を出せる場面をつくっていく。苦手なことでは、何に困っているのか見立てて、支援していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 注意ばかり受けているというとならないう、少しでもできている場面や正統的なアピールをしている場面で認めていく。
支援の実際	<ul style="list-style-type: none"> 教育相談などを行い、体調の悪さや、学習意欲が減退しているという訴えを聞き取った。 	
支援の結果	<ul style="list-style-type: none"> 文化祭の合唱や部活動などにも参加した。 	<ul style="list-style-type: none"> 体調の悪さを自覚しつつ、日常生活をきちんと送ることができるようになった。

生徒C

課 題	一斉授業についていけない	自己表現が苦手
生徒の様子	<ul style="list-style-type: none"> 出された課題に対してまじめに取り組もうとするが、なかなか答えを出せない。 なかなか答えを出せなくても、いい加減にしたくない様子が見られる。 課題に取りかかるのが遅く、発表もすぐには声を発しないので、やる気がないように見える。 	<ul style="list-style-type: none"> 連絡帳の記述から、妹に優しく接している様子が感じられる。ただ、「疲れた」など否定的な記述もみられる 友人関係も積極的に話をするようではないが、周りの生徒からは、落ち着いて話ができる信用できる相手のようなのである。
支援方法	<ul style="list-style-type: none"> 取り組み始めるタイミングを伝えて、早めに取り組ませるなどの配慮をする。最後までやりたい気持ちを大切に作る。 内容と時間との兼ね合いでベストの選択ができるように、時間内にやりきることに重点をシフトしていけるように評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> 家族や友人にとっては優しく信用できる子であるが、逆に自分の嫌な思いを表出できているかを気にしていく。 連絡帳でのやり取りを大切にしていく。
支援の実際	<ul style="list-style-type: none"> 国語の授業での課題について、十分な時間を取り、近くで見守った。 	<ul style="list-style-type: none"> 連絡帳に見られた悲観的な記述や否定的な記述を肯定的に受け止めた。
支援の結果	<ul style="list-style-type: none"> 授業での課題を時間内にできるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> 穏やかに話をする友人関係ができた。また、困ったことは教員に伝えることができた。

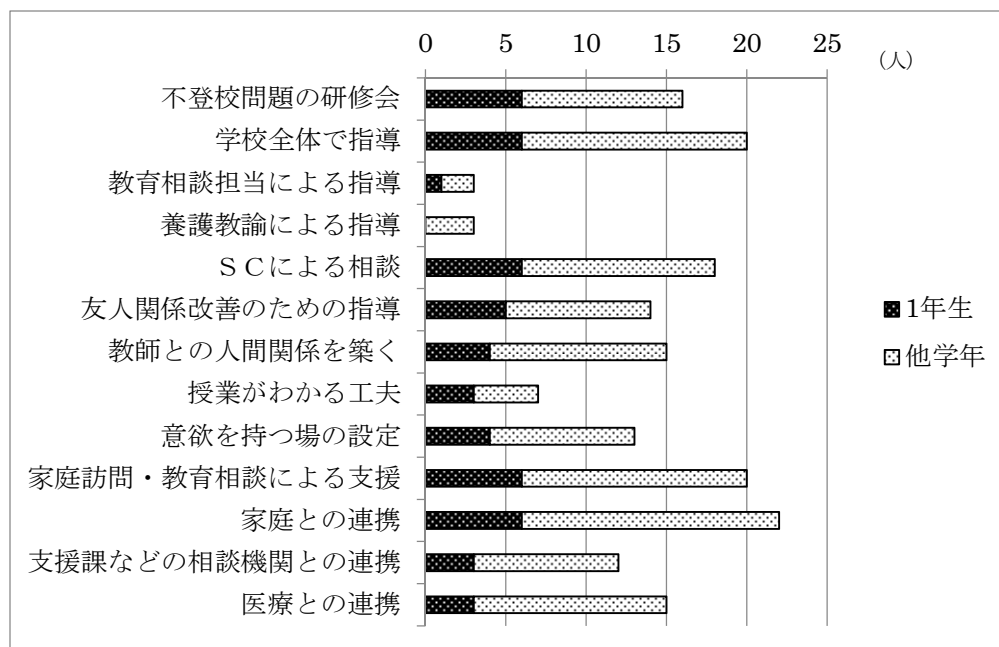
生徒D

課 題	対人関係のトラブルが多い
生徒の様子	<ul style="list-style-type: none"> 友人とのかかわりが苦手で、手を出そうとするなどの攻撃性がみられる。 乱暴な言葉遣いをするので言い返されることも多い。その時は自分だけが一方的に攻撃されるととらえる傾向がある。 授業中に後ろを向いて話そうとする姿が多いが、それは自分の後ろの席の生徒が話かけてくることが悪いと考えている。
支援方法	<ul style="list-style-type: none"> 我慢している場面をとらえて、積極的にほめていく。 主張は認めつつ、よりよい言い方を具体的に教えていく。 本人なりの正論は認めた上で、ルールは守るべきこととして言い訳に使われないようにする。
支援の実際	<ul style="list-style-type: none"> 休み時間に意識的に声かけを行った。 文化祭の取り組みにおいて、パートリーダーとして一生懸命活動する姿や、歌が苦手な生徒に対して声掛けなどを行う姿があったため、それを認め、学級全体にも伝えた。 三者懇談会でも、本人の文化祭での頑張りを保護者に伝えた。
支援結果	<ul style="list-style-type: none"> 周囲と言い争う姿がみられなくなり、トラブルなく学校生活を送ることができるようになった。 とてもよい表情で学級の取り組みに参加した。 学級で過ごす時の表情もよくなった。

生徒E

課 題	認知に課題がみられる
生徒の様子	<ul style="list-style-type: none"> 友だちとの関係は良好であるが、体育祭の「友達よかった点」が事実しか記入できなかった。周りの様子を見ていない状況がある。 文章はひらがな表記が多く「応援」が「おえん」になっていたりする。 自分の思いや感じたことを文章にするのがあまり得意ではない。 学習に関することは、自分の言葉で説明することができる。
支援方法	<ul style="list-style-type: none"> 事実の裏にある雰囲気について説明する。 教育相談や連絡帳のやり取りの中で、丁寧に気持ちを聞き取っていく。 教師が気持ちを表す言葉で、感情の表し方の見本や具体例を示していく。
支援の実際	<ul style="list-style-type: none"> 連絡帳に感想を書くように促すコメントを書いた。 本人の得意な数学と理科の授業で、どうしてそう考えたのかを言語化できるように仕向けた。
支援の結果	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いについては、文章でなく単語でしか表現できない様子があった。

支援については、担任および学年担当が中心となって行ったが、「教職員アンケート」で協力校教職員が効果的だと思う支援方法は【図6】のとおりであり、学校や学年、担任による支援だけではなく、家庭や医療、相談機関との連携、スクールカウンセラー（以下SC）の活用など他機関などとの連携を有効だとする回答が多くあった。



【図6】 不登校の未然防止に効果的だと思う支援方法

4 支援の効果

(1) 欠席等の日数

抽出生徒5人の4月から12月末までの欠席等の日数は以下のとおりであった。

生徒A：0日 生徒B：5日（早退4日） 生徒C：1日 生徒D：0日 生徒E：1日

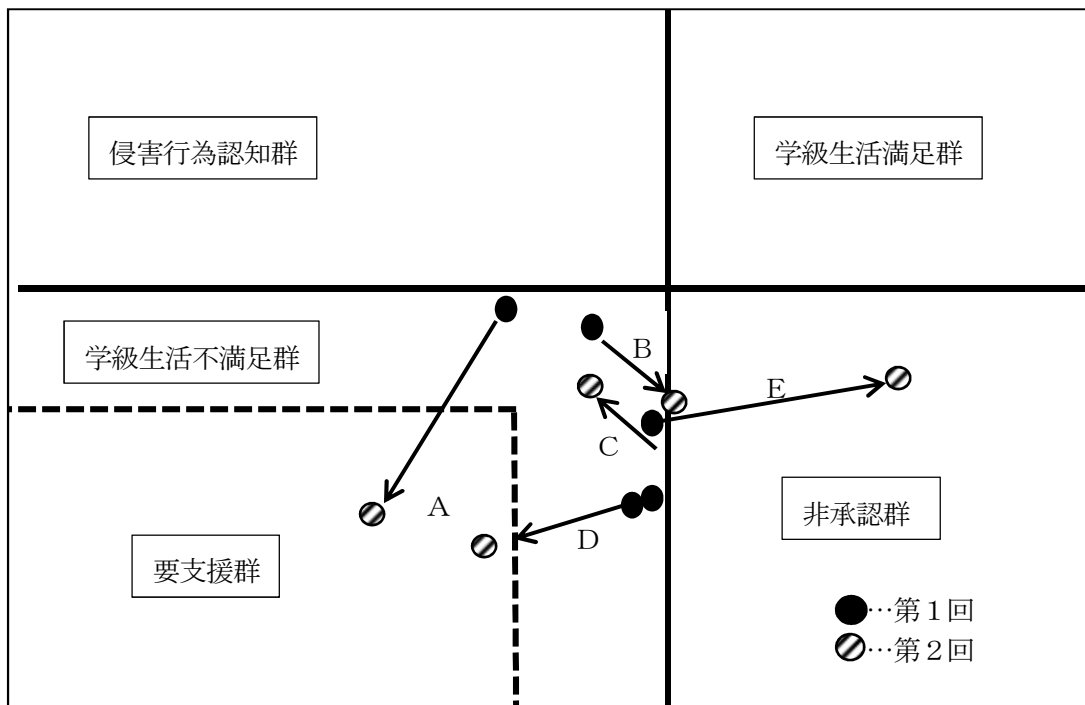
いずれも欠席日数は不登校にあたる30日、リスク群にあたる10日を越えなかった。また別室登校はなかった。

(2) 不登校出現率

協力校の中学1年生で4月から12月末までの不登校出現率はおおよそ0.8%であった。また、昨年度と一昨年度、協力校の中学1年生の不登校出現率は、それぞれ約0.8%、約1.7%であった。ちなみに、平成27年度、四日市市の中学1年生の不登校出現率は約2.5%である。

(3) Q-U検査結果

Q-U検査については、第1回が5月に、第2回が10月に実施された。抽出生徒5人の検査結果の推移は【図7】のとおりである。



【図7】 抽出生徒のQ-U検査結果の推移

2回行われたQ-U検査結果の推移【図7】を見てみると、生徒Aと生徒Dについては学級生活不満足群から要支援群へと変化しており、Q-U検査における学級生活への満足度はさらに低下した。生徒Bは侵害得点が増加し、承認得点は減少した。生徒Cについては、被侵害得点が減少し、承認得点が増加していた。生徒Eについては、承認得点も被侵害得点も増加した。

VI 考察

1 生徒の抽出

今回はQ-U検査をもとに「不満足群生徒」を抽出し、適応指導教室が課題を設定し支援方法を提示したが、抽出した5人の生徒は不登校にならなかった。ただ不登校出現率は昨年度と同じであり、「教職員アンケート」からは、支援の有効性を疑問視する声もあった。

まず、生徒の抽出については、抽出生徒を「不満足群生徒」としたことに、協力校の教員との意見の齟齬があり、抽出が正しかったかという点については課題が残った。このことから、不登校に至るリスクを性格、行動、友人関係、家庭状況、発達の課題など複合的にとらえていくことが重要だと考えた。また、そのためには学年の教員が意見のすり合わせを行うための会議が必要であろう。

次に、支援に必要な情報については、「連携シート」が小学校から引き継がれているものの、「教

職員アンケート」では「小学校であげられた生徒が必ずしも中学校で支援が必要になるとはかぎらない」「小学校からの情報と入学時の本人の様子とはギャップがある」という意見があげられた。このことが、「連携シート」に約半数の教員がチェックしなかったことにつながっていると考えられる。

その原因として、小学校で不登校を経験した生徒が、中学校入学と同時に再出発する気持ちを持つことがあり、それが有効に働くことがあるからだと推察できる。また、授業が学級担任制から教科担任制に替わることがよい影響を与えることも考えられる。したがって、「連携シート」にあげられた生徒についても、中学入学後改めて情報を収集し、整理するツールが必要であると考えた。逆に、「連携シート」にあげられていなくても、気になる生徒についてアセスメントができれば、より教育現場の実情に合ったものになるだろう。

2 アセスメント

協力校の実践から、「観察の視点」を持つことで生徒の課題が見えやすくなることがわかった。このことから、生徒をアセスメントするうえで、観察する際の視点をはっきりさせ、共有することが大切だと考えた。また、今回、抽出生徒のアセスメントを適応指導教室が行ったが、今後、学年会でアセスメントを行っていくためには、支援する際に学年内で中心となる教員の育成が望まれる。

3 抽出生徒への支援

支援については、生徒の課題に沿った初期対応を、学年で足並みを揃えて行えたことが成果としてあげられる。Q-U検査での学級生活に対する満足度が低下している生徒についても不登校に至っていないという点から、支援はおおむね適切であったと推察する。「教職員アンケート」で「本人の特性についてさまざまな角度から分析したことで、学年として対応を揃えることができた」という意見もあり、学年会を中心とした取り組みで一定の成果は得られたと考えている。しかしながら、協力校の昨年度、一昨年度の不登校の出現率の低さを考えると、適応指導教室が支援方法を提案する以前から、日常的に適切な支援が行われていた様子が見えてくる。今後、そういった有効な支援方法を整理していくことで、汎用性が出てくるであろう。

また、「教職員アンケート」の「不登校の未然防止に効果的だと思う支援方法」【図6】でも、「家庭訪問・教育相談による支援」「家庭との連携」に次いで、「学校全体で指導」や「不登校問題の研修会」と回答した数が多くなっており、未然防止に関して学校や学年全体での組織的な取り組みを望んでいることがわかる。

その一方で、「SCによる相談」や「医療との連携」という項目も多くなっており、専門的な知識を持った人材が支援方法を提案していくことも必要とされていると推察する。今後、関係機関や専門家と連携しながら組織だった支援ができる支援体制の構築が必要になってくるであろう。

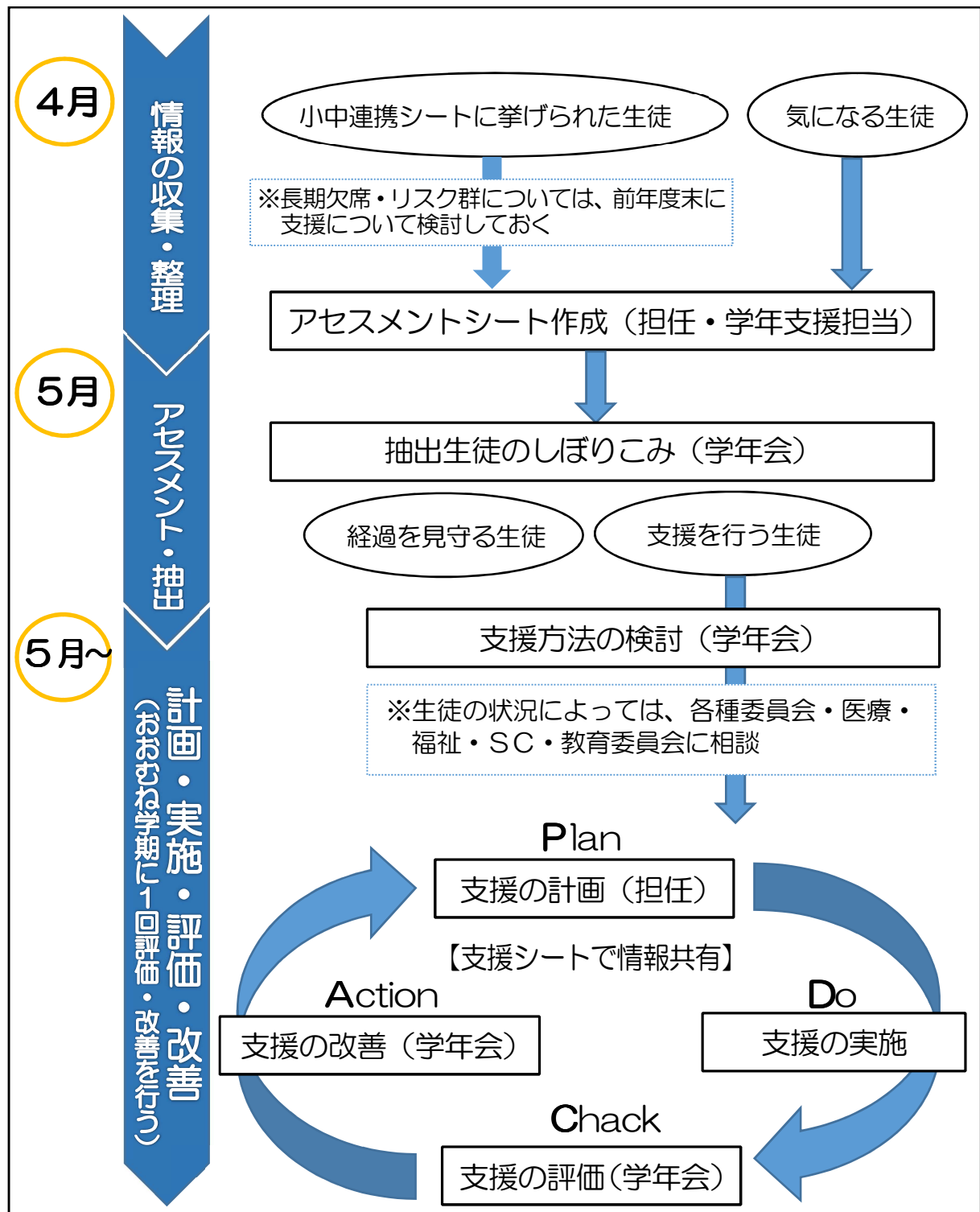
4 支援の計画・実施・評価

今回、学校現場の多忙化を避けるために、適応指導教室と協力校のやり取りをメールによるものとしたが、支援の計画・実施・評価・改善のサイクルがうまく機能しなかった面があった。対面で話し合うことに比べて、支援の意図がうまく伝えきれなかったところや、支援方法を学校現場の状況に合わせていくことが難しいところがあった。このことから、生徒の支援をしていく上で、情報を共有し、話し合い、検討する時間の確保は、やはり不可欠だと感じた。そのためには、効率的に会議を進めるための工夫が大切である。まず校内で支援体制のモデルを位置づけていくことが必要になると思う。

Ⅶ これからの校内支援の在り方

1 不登校未然防止に向けての校内支援体制のモデル

考察をふまえて、不登校の未然防止に向けて、どの時期に、どのような流れで取り組んでいけばよいかを示した校内支援体制のモデルを、以下のように提案する。



【図8】校内支援体制のモデル

2 情報の収集と整理

生徒の抽出とアセスメントを行うために、「連携シート」の情報に中学入学後の新たな情報を加えて、情報の整理を行う必要があると考えた。そこで、生徒の情報を「教職員アンケート」をもとに5項目に分類した【表2】。さらに、それを受けて、情報整理のツールとして「アセスメントシート」を作成した【図9】。このシートでは、中学校の教員の観察による情報を活用していくために、【表2】から観察していく項目を「チェックの視点」としてまとめ、支援の重点が把握できるようにした。今回は協力校の情報のみで作成したが、今後はより正確なものとするために、アンケートを行う対象校を増やすことや、実際にこのチェックの視点を活用することが効果に結び付いたかという検証が必要となるだろう。また、[気になるエピソード]として、具体的なエピソードを記入する欄を設け、学年会で生徒の課題設定を行う際の一助としたい。

【表2】不登校のリスクを持つと考えられる生徒の特徴

① 性格	・自己肯定感が低い ・耐性が低い ・柔軟性がない
② 行動	・自己表現が苦手 ・活動に消極的、無気力 ・人の目を気にする
③ 学力	・一斉授業では理解できない ・極端に苦手な教科がある ・集中力が持続しない
④ 友人関係	・コミュニケーションをとるのが苦手 ・友人関係のトラブルが多い ・孤立している
⑤ 生活・家庭	・家庭で乱暴な言動がある ・生活習慣が整っていない ・家族に不登校経験者がいる

3 生徒のアセスメントと抽出

生徒の抽出にあたって、担任のアセスメントを軸にしながらも、より多面的に生徒を観察できるとよいと考えた。そこで、「アセスメントシート」を用いて担任がアセスメントを行い、その後、学年会で検討し抽出するというモデルを提案したい。アセスメントシートの[担任から見た生徒の課題]をもとに、学年会ででの検討を行った上で「支援シート(改訂案)【資料5】の[生徒の課題]欄に記入するとよいと考える。

アセスメントシート

()年()組 名前()

気になるエピソード

・「中学生になって」の作文がなかなか書けなかった。
 ・授業では課題に一生懸命取り組んでいるが、連絡帳には「つかれた」という記述が多い。
 ・仲の良い友達はあるが、自分から話しかける様子がない
 ・部活動(テニス部)を見学したり、欠席することが多い

チェックの視点

性格	行動	学習	人間関係	生活・家庭
自己肯定感が低い	活動に消極的・無気	一斉授業では理解が	人間関係のトラブルが多い	生活習慣が整っていない
耐性が低い	人の目を気にする	極端に苦手な教科が	コミュニケーション	家族に不登校経験者がいる
柔軟性がない	自己表現が苦手	集中力が持続しない	孤立している	生活習慣が整っていない
○	○	○	○	○

当てはまる項目に○をつける

担任から見た生徒の課題

柔軟性がなく、0か100かで物事を考えるので、ある程度できていても、できていないと感じることが多い。

具体的なエピソードを記入

支援の重点を把握する。

【図9】アセスメントシート

4 支援の計画

学年間で支援についての情報を共有するために「支援シート(改定案)」【図10-①②】を作成した。

[生徒の課題]の欄については、「アセスメントシート」の[担任から見た生徒の課題]をもとに、学年会で検討を行った上で記入するとよいと考えた。

また、具体的な支援について考えるために、[支援が必要と考えられる場面]の欄を設けた。学年会で支援内容を検討していく上で、どのような場面で支援が必要かを意識することが、具体的な支援を行うために必要であると考えからである。

支援内容については、学習面や対人関係での躓きを少なくするための手だてを行うことと、肯定的評価を行い自己有用感を育てていくことを念頭に置いて検討されることが望ましい。

5 支援の実施

支援を実施していく際は、「支援シート(改訂案)」を活用して学年で情報共有を行い、学年や学校全体でチーム支援を行っていくことが大切である。中学校では1人の生徒に多くの教員が関

わかることから、さまざまな場面で複数の教員が同様の支援をおこなっていくことが、不登校になるリスクを減らすことにつながると考える。また、「支援シート(改定案)」記入の際と同様に、それぞれの教員が具体的な支援場面を想定して支援にあたることが大切であろう。

支援シート ()月~()月 見直しの時期()月
()年()組 名前()

生徒の課題
まじめで柔軟性がないため、少し失敗すると気持ちが落ちてしまうことが多い

支援が必要と考えられる場面

学習				対人関係			生活				行事			
授業	テスト	提出物	ノート	休み時間	部活	班活動	身なり	持ち物	家庭の生活リズム	学校での生活リズム	室	会		
	○	○			○							○		

困り感が出てくると予想される場面に○をつける

支援内容・評価

支援する場面	支援内容	評価
テスト	テストを行う前に、達成できるような目標を設定してやり、プラスの評価がでるようにする	(継続) 改善)
部活	できなかったときに強い叱責を受けることがないよう、部活担当と連絡を取り合う	(継続) 改善)
提出物	早めに取り組みを始められるよう、声掛けをする。考えてもわからない場合は、答えを写しても良いことを伝える	(継続)

支援場面を想定し、できるだけ具体的に書く

【図 10-①】 支援シート

6 支援の評価・改善

支援の評価と改善についても、学年会で検討されるとよいと考える。まず、計画した支援を行うことができたかを振り返り、できなかったのであれば、再度支援の内容を確認したい。支援を行っても、生徒の変容が見られなかった場合は改善をおこなうが、その際、生徒の課題を見立て直すのか、支援する場面を変更していくのか、支援方法を改善していくべきかの検討が必要となってくる。いずれの場合も「支援シート(改定案)」を使い、支援の改善を行いたい。

支援内容・評価		
支援する場面	支援内容	評価
テスト	テストを行う前に、達成できるような目標を設定してやり、プラスの評価ができるようにする	(継続) 改善)
部活	できなかったときに強い叱責を受けることがないよう、部活担当と連絡を取り合う	(継続) 改善)
提出物	支援を継続するか改善するか記入	(継続) 改善)
		(継続) 改善)

支援結果に関するコメント

提出物についてきちんとやりたい気持ちが強く、担任や教科担当が声かけをしても、必要以上に時間がかかってしまった。声かけの内容を検討していく余地あり

生徒の変容や、改善が必要な理由について記入

【図 10-②】 支援シート

VIII まとめ

本研究では、不登校のリスクを持つと思われる生徒に焦点をあてて、不登校未然防止に向けた校内支援体制のモデルを作成するとともに、試行した。その中で、修正すべき点を考察し、新たな校内支援体制のモデル作成と、校内での支援を進めるためのツールとして「アセスメントシート」と「支援シート（改定案）」を提案した。

1 成果

(1) 不登校未然防止に向けての校内支援体制のモデルの提案

校内支援の具体的な進め方についてリーフレットを作成し提案した【資料6】。今後、校内支援体制のモデルを本市不登校対策委員会などで検証し、汎用性の高いものに改善していくことが望まれる。教育現場の不登校対策の中で、未然防止の取り組みはどうしても後手に回ること多いと思われるが、校内において、どのような手順で不登校対策として取り組んでいくかのモデルを示すことで、未然防止の取り組みを教育活動に位置づけていくための一助としたい。

(2) アセスメントシートの提案

本研究の課題をふまえて、考察において、アセスメントシートを提案した。「アセスメントシート」は「連携シート」の情報を補い、中学校に入学してから新たに情報を整理し直すために活用する。その中で【表2】のような、不登校になるリスクを持つと思われる生徒についての一つの見方を示し、①性格、②行動、③学力、④友人関係、⑤家庭状況の5側面に分けて具体的な姿を示した。不登校のリスクを全て網羅するものではないが、これまで漠然としていたものを[チェックの視点]として、「アセスメントシート」で具象化していくことが

できた。

これまで、実際に不登校の兆候の見える生徒については学年や学校で対応が検討されたと思うが、「連携シート」が作成されてはいても、課題が表面化していない生徒や、担任が漠然とリスクを感じている生徒については、組織的な対応が検討されることは少なかったと思われる。「アセスメントシート」を活用することによって、そのような生徒を学年会の検討の場にあげていくことができると考える。

(3) 支援シートの提案

「支援シート」は、シートに記入することで、支援方法を具象化し、教員間の情報共有を行えると考えている。支援方法については、本研究では適応指導教室が提案したため、校内でどのようにして支援方法を提案し改善していくかについては、今後の課題となる。しかし、組織的に支援を行っていくことによって、それぞれの教員の持つスキルが蓄積され汎用性が高まっていくものと考えている。

2 課題

(1) 不登校のリスクの検証

本研究において、不登校のリスクを特定するまでには至らなかった。試案で行った生徒の抽出は、協力校の教員と齟齬があったため、抽出について見直しを行い、アセスメントシートを作成したが、抽出についての考え方を示したに留まる。今後は、各校の教職員に聞き取りを行ったり、不登校の経験がある生徒の追跡調査を行ったりして、さらに情報を集めていくことが求められる。

(2) 不登校未然防止に向けた校内支援体制のモデルの実効性

校内支援体制のモデルについては、リーフレットにて提案したのみに留まる。学校現場で有効に機能させる方策の検討が必要であろう。また、あわせて、モデルを実際に使って、不登校の未然防止に効果があるかの検証が必要であると考ええる。

本市での不登校の未然防止に向けた個別支援の取り組みは緒についたばかりである。今後、さらに検討を重ね、実効性のあるものにしていくことが望まれる。

[引用文献]

- 国立教育施策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2012）「不登校・長期欠席を減らそうとしている教育委員会に役立つ施策に関するQ&A」 p. 16
- 鳥取県教育センター（2006）「不登校への予防的対応としての「学級づくり」に関する研究調査—研究協力校の事例から—」 p p. 4-24
- 西森一彰・林美枝（2010）「Q-Uを活用した、温かい学級づくりの研究—不登校の未然防止・早期発見・早期対応に向けて—」 p p. 1-12
- 松本浩司（2007）「不登校未然防止のための心の居場所づくりの研究—対人関係能力を育てる一次的アプローチの取り組みを通して—」 p p. 137-141
- 文部科学省（2014）「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」 p. 13
- 四日市市教育委員会（2014）「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

[参考文献]

- 石隈利紀（1999）「学校心理学」誠信書房
- 国立教育施策研究所生徒指導研究センター（2012）「国立教育施策研究所生徒指導研究センター中1不登校生徒調査（中間報告）—不登校の未然防止に取り組むために—」
- 高橋宗・吉川栄子（2006）「学級集団を形成する要因についての検討—学級満足群と友達関係において—」 聖泉論叢
- 地井和也（2011）「中学生の登校回避感情と自己肯定意識の関連についての調査」 人文
- 中島義実・原明子（2009）「登校回避感情の類型と、促進要因・抑制要因との関係—登校回避感情の頻度と強度、双方からの測定による類型の試み—」 研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集—2巻2号
- 平石賢二（1990）「青年期における自己意識の発達に関する研究—自己肯定性次元と自己安定性次元の検討—」 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)37
- 本間友巳（2000）「中学生の登校をめぐる意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析」 教育心理学研究 48

小中不登校連携シート		6年 組		出席番号 (ふりがな) 番 名前		
四日市市立		中学校進学		小学校卒業 男 女		
出席状況	6年生の状況	欠席日数	日	遅刻	日	別室(保健室)登校 有 無 (場所:)
	5年生の状況	欠席日数	日	早退	日	別室(保健室)登校 有 無 (場所:)
	4年生の状況	欠席日数	日	遅刻	日	別室(保健室)登校 有 無 (場所:)
Q U	直前回	<input type="checkbox"/> 侵害行為認知群 <input type="checkbox"/> 非承認群 <input type="checkbox"/> 学級生活不満足群 <input type="checkbox"/> 要支援群				
	前々回	<input type="checkbox"/> 侵害行為認知群 <input type="checkbox"/> 非承認群 <input type="checkbox"/> 学級生活不満足群 <input type="checkbox"/> 要支援群				
学力	<input type="checkbox"/> 一斉での指導で理解が困難である <input type="checkbox"/> 全体的に学力の遅れがみられる					
本人の特性	<input type="checkbox"/> 極端に苦手なものがある <input type="checkbox"/> 自分の意見が話せない					
	<input type="checkbox"/> コミュニケーションの苦手さがある <input type="checkbox"/> 対人交流に何らかの課題がある					
	<input type="checkbox"/> 相手の気持ちを理解できない <input type="checkbox"/> 場の雰囲気よめない					
	<input type="checkbox"/> 自分の気持ちを表現することが苦手である <input type="checkbox"/> 理解力が低い					
	<input type="checkbox"/> 複雑な意思決定が苦手である <input type="checkbox"/> こだわりがある					
作成理由と対応	特に提供すべき重点情報 () 上記に対する小学校での対応・支援方法					
本人や家庭の様子・状態	【本人の様子(状態)】 (性格) <input type="checkbox"/> まじめすぎる <input type="checkbox"/> いつもおとなしい <input type="checkbox"/> 悲観的 <input type="checkbox"/> 自己中心性がある <input type="checkbox"/> 緊張しやすい <input type="checkbox"/> 我慢が苦手			特記事項(あれば)		
	(行動) <input type="checkbox"/> 無気力ないし消極的 <input type="checkbox"/> 嫌なことを避けようとする <input type="checkbox"/> 気分の浮き沈みがある <input type="checkbox"/> 不安が強い <input type="checkbox"/> 乱暴な言動がある(特に家庭において) <input type="checkbox"/> 自傷行為(抜毛、リストカット等)がある <input type="checkbox"/> 集団活動ではおどおどする または行動が遅れる <input type="checkbox"/> 極端に苦手なものがある ()					
	(友人関係) <input type="checkbox"/> 孤立している <input type="checkbox"/> 特定の子だけよい <input type="checkbox"/> 自分から仲間に入れない <input type="checkbox"/> 友だちといっても会話が少ない <input type="checkbox"/> いじめ被害の経験がある <input type="checkbox"/> いじめ加害の経験がある <input type="checkbox"/> 他人の評価を気にする <input type="checkbox"/> 学校以外で遊ぶ友達がいない					
	(健康生活面) <input type="checkbox"/> 生活リズムが不規則である <input type="checkbox"/> 睡眠のリズムが乱れやすい <input type="checkbox"/> 服装が清潔でない <input type="checkbox"/> 忘れ物が多い <input type="checkbox"/> 不調を訴え、保健室に行きたがる					
	【保護者・家庭の状況】 <input type="checkbox"/> 家族に、不登校もしくは不登校経験者がいる <input type="checkbox"/> 保護者に何らかの疾患がある <input type="checkbox"/> 保護者からの欠席連絡がない <input type="checkbox"/> 些細なことで、保護者から問い合わせがある <input type="checkbox"/> 提出物や集金の提出が滞りがちである <input type="checkbox"/> 虐待、または疑いがある <input type="checkbox"/> 保育幼稚園・小学校時に、登校渋りがあった (年時 理由:)					
	【関係機関との連携】 <input type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> スクールカウンセラー <input type="checkbox"/> 教育支援課相談窓口 <input type="checkbox"/> YESnet <input type="checkbox"/> 適応指導教室 <input type="checkbox"/> 発達総合支援室 <input type="checkbox"/> 医療機関 <input type="checkbox"/> その他					
	【その他 中学校に伝えるべき情報や特に配慮してほしいこと】					
その他						
担任(記入者)						

※このシートは、不登校児童生徒の支援のために活用するものであり、その目的以外には活用しません。

【支援シート】

仮説の課題	自己中心性があり、孤立してしまう
観察の視点①	どういった場面で自己中心性が見られるか。
気づいたこと	友人とのかかわりがあまり上手ではなく、特に男子とのかかわりにおいては、手を出そうとするなどの攻撃性も見られる。本人は男子とのかかわりの中で口が悪い様子が見受けられる。そのため男子から言い返されることも多い。ただその時は自分だけが一方的に攻撃されるとらえる傾向がある。また、授業中に後ろを向いて話そうとする姿も多いが、それは自分の後ろの席の生徒が話かけてくるのが悪いと考える様子もあった。 【記入日 9月27日】
観察の視点②	孤立傾向がみられるか
気づいたこと	一学期は周りの生徒と関わりが弱く、女子数人と休み時間に過ごす姿が多く見られた。しかし、体育祭の活動を通して他の女子とのかかわりが増え、また男子ともかかわる姿も増えた。ただ上述のように男子とのかかわりにおいては言い合いになる様子もある。 【記入日 9月27日】

課題	支援方法	実際の支援(誰が・どのような場面で・いつしたかを記入)	支援の結果
交友関係	我慢している場面をとらえて、言い返さなかった、手を出さなかった等を積極的にほめていく。 【記入日 10月12日】	文化祭の取組において、周りの生徒に対して不満があることをスマイルライフに書いてきた。本児はバードリーダーとして一生涯活動しており、同じパートの合唱が苦手な生徒に対して、声掛けをしたり応援したりする姿があったため、それを認め、本児も学級に必要であることを伝えた。その後はとても良い表情で学級の取組に参加してくれた。 【記入日11月15日】	文化祭の取組や授業の中での声掛けで褒めることを増やした結果、少しずつ学級でもいい表情で過ごしている。また、周囲と言い合いをする様子なども最近は見られなくなった。 【記入日11月15日】
	正論(話しかけてきたから後ろを向いた)は正論として認めた上で、ルール(授業中は後ろを向かない)については理由はないこととして言い訳に使われないようにする。 【記入日 10月12日】		普段の休み時間の声掛けを意識して行い、困っていることはないか確認している。特に問題もなく、学校生活を送っている。 【記入日12月21日】
	言い方の問題であれば、言っている内容は認めつつ、よりよい言い方を具体的に教えていく。(せっかくなことをいうのだから、分かってもらった方が得という考え方) 【記入日 10月12日】	このような場面は起きなかった。生徒を褒めることを日常的に行い、三者懇でも、文化祭の取組に一生涯取り組んでいたことを保護者に伝えた。 【記入日12月21日】	

不登校未然防止に関するアンケート

不登校未然防止に関する研究についてのアンケートです。先生方の率直なご意見をお聞かせください。

(1) 不登校になるリスクを持っていると感じる生徒はどのような生徒ですか。

(2) 小中不登校連携シートに挙げられた生徒が、不登校になるのを未然に防止するための支援として、効果的だと思う方法を5つ選んでチェックを入れてください。

また、そのほかに効果的だと思われる支援方法があれば、その他の欄に記入してください。

- ① 不登校の問題について、研修会や事例研究会を通じて全教師の共通理解を図る。
- ② 全ての教師が触れ合いを多くするなどして学校全体で指導に当たる。
- ③ 教育相談担当の教師が専門的に指導に当たる。
- ④ 養護教諭が専門的に指導に当たる。
- ⑤ スクールカウンセラー、相談員等が専門的に相談に当たる。
- ⑥ 友人関係を改善するための指導を行う。
- ⑦ 教師との触れ合いを多くするなど、教師との人間関係を築く。
- ⑧ 授業方法の改善、個別の指導など授業が分かるようにする工夫を行う。
- ⑨ 様々な活動の場面において本人が意欲をもって活動できる場を用意する。
- ⑩ 家庭訪問や教育相談を行い、学業や生活面での相談にのるなど様々な指導・援助を行う。
- ⑪ 保護者の協力を求めて、家族関係や家庭生活の改善を図る。
- ⑫ 教育委員会の支援課等の相談機関と連携して指導に当たる。
- ⑬ 病院等の医療機関と連携して指導に当たる。

⑭ その他

(3) 小中不登校連携シートで小学校から引き継がれた情報で、不登校の未然防止に活用できると感じた情報はどれですか。重要だと思われるもの3つにチェックを入れてください。

また、そのほか引き継いでほしいと思うことがあれば、その他の欄に記入してください。

- ① 本人の性格
- ② 本人の行動の様子
- ③ 本人の学習の様子・学力
- ④ 本人の友人関係
- ⑤ 本人の健康生活面の様子
- ⑥ 本人の学校での好きな活動・苦手な活動
- ⑦ 小学校の指導の経過
- ⑧ 保護者・家庭の状況

⑩ その他

(4) 今回、研究にご協力いただき、気づかれたことがありましたらお書きください。

平成28年12月6日 教育支援課・適応指導教室

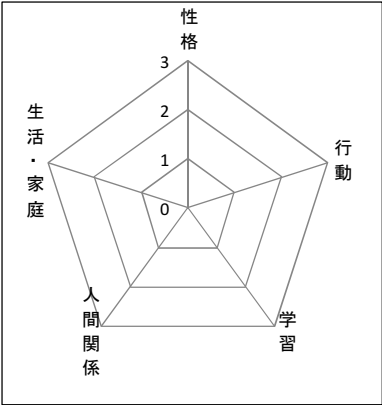
アセスメントシート

()年()組 名前()

気になるエピソード

チェックの視点

性格			行動			学習			人間関係			生活・家庭		
自己肯定感が低い	耐性が低い	柔軟性がない	自己表現が苦手	活動に消極的・無気力	人の目を気にする	一斉授業では理解できない	極端に苦手な教科がある	集中力が持続しない	コミュニケーションをとるのが苦手	人間関係のトラブルが多い	孤立している	家庭で乱暴な言動がある	生活習慣が整っていない	家族に不登校経験者がいる



担任から見た生徒の課題

支援シート(改訂案) ()月~()月 見直しの時期()月
 ()年()組 名前()

生徒の課題

--



支援が必要と考えられる場面

学習				対人関係			生活				行事				
授業	テスト	提出物	ノート	休み時間	部活	班活動	身なり	持ち物	家庭の生活リズム	学校での生活リズム	自然教室	体育大会	文化祭	夏休み	冬休み

支援内容・評価

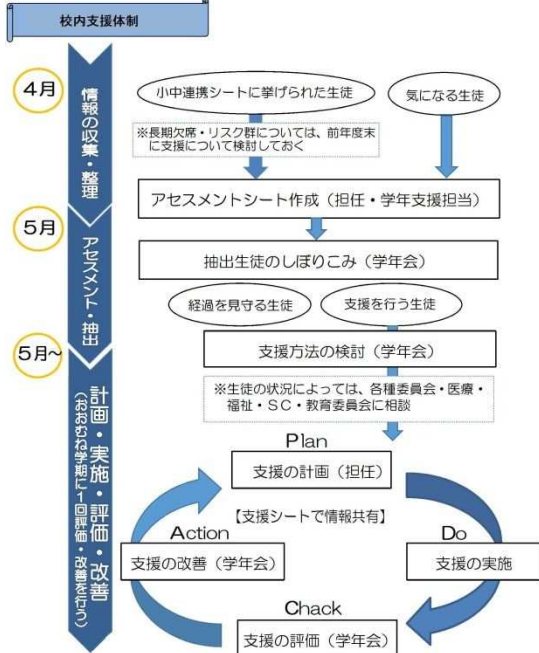
支援する場面	支援内容	評価
		(継続 ・ 改善)
		(継続 ・ 改善)
		(継続 ・ 改善)
		(継続 ・ 改善)

支援結果に関するコメント

--

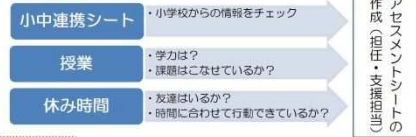
不登校を未然に防ぐための校内支援

◎ねらい◎ 学級・学年で気になる生徒（不登校リスクの高い生徒）に対して、チーム（学年担当など）で支援することが、不登校を未然に防ぐ一助となる。

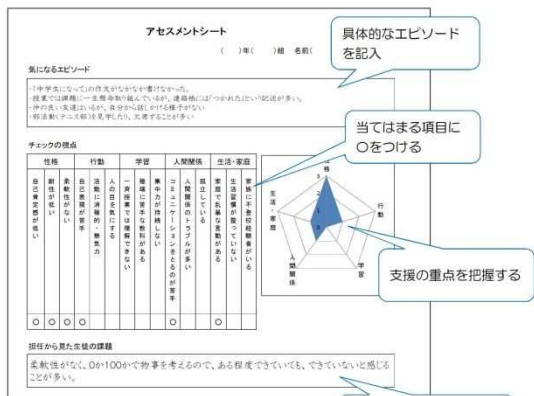


情報収集・情報の整理・アセスメント・抽出

(1) 情報収集



(2) 情報の整理



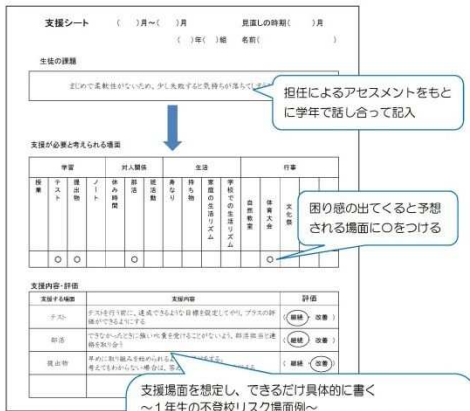
(3) アセスメントと抽出

・担任の記入した「アセスメントシート」をもとに、その中から学年全体で支援する生徒を抽出する。
 ・抽出しなかった生徒については、「見守り生徒」として経過を観察していく。その際、アセスメントシートはファイルに綴じて保管し、必要に応じて見ることができるようしておく。

PLAN：支援の計画

◆支援内容検討のポイント

- ・学習面のみならず 対人関係のみならずを少なくする。自己有用感を育む。
- 居場所づくり 終つくり 授業づくり
- 肯定的評価 対人スキルの育成 合理的配慮



DO：支援の実施

◆支援のポイント

- ・支援シートを活用して、学年や学校全体で支援していく
- 情報共有 多角的支援 焦点化
- みんなで 様々な場面で 具体的に

CHECK：支援の評価

◆評価のポイント

- ・学年会で支援の実態と生徒の変容について振り返りを行う。
- ・支援シートを活用して、支援結果を記録し、情報を引き継ぐ。
- 支援の実際 生徒の変容 支援の継続
- 計画通りに支援できたか 変容はあったか 継続すべきか



ACT：支援の改善

◆改善のポイント

- ・学年会で、支援内容の見直しを行い、新しく行う支援内容については、新しい支援シートに記入する
- ・学年会での検討が難しい場合は、管理職、各種委員会、スクールカウンセラーなどに相談する
- ・状況によっては、医療、福祉、教育委員会などの外部機関に相談する



☆学年末には、支援の内容を次の学年へ引き継ぎ

不登校を未然に防止するための校内支援の研究
—学級生活不満足群の生徒に焦点をあてて—

〔執筆 者〕	四日市市適応指導教室	指導員	宮崎 久美
	四日市市適応指導教室	指導員	奥野 由佳里
	四日市市適応指導教室	指導員	渡辺 由紀
〔指導・助言〕	国立教育政策研究所	総括研究官	松尾 知明

研究調査報告 第403集

不登校を未然に防止するための校内支援の研究
—学級生活不満足群の生徒に焦点をあてて—

発行 平成29年3月22日
発行所 四日市市教育委員会教育支援課
四日市市諏訪町2番2号
電話 (059) 354-8149
FAX (059) 359-0280
